

令和3年度文部科学省委託事業

学校安全総合支援事業 報告書



三重県教育委員会

<目次>

1	事業の趣旨・経緯	1
2	学校安全総合支援事業推進委員会	3
3	三重県の事業	
	（1）防災教育推進支援事業.....	4
	（2）学校防災ボランティア事業.....	7
	（3）北勢地域での取組	9
4	鳥羽市の事業	
	（1）南勢地域での取組	12
5	御浜町の事業	
	（1）東紀州地域での取組.....	19

1 事業の趣旨・経緯

(ア) 事業名

学校安全総合支援事業（学校安全推進体制の構築）

(イ) 事業の趣旨

平成 28 年度に閣議決定された「第 2 次学校安全の推進に関する計画」に基づき、国において、安全教育、安全管理、組織活動の各内容を網羅して解説した総合的な資料として、「学校安全資料『生きる力』をはぐくむ学校での安全教育」が平成 31 年 3 月に改訂された。

「学校安全資料『生きる力』をはぐくむ学校での安全教育」においては、学校種ごとに安全教育の目標を定めており、中学校では、災害発生のメカニズムの基礎、さまざまな地域の災害事例と日常の備えや災害時の助け合いの大切さへの理解、自他の安全のための主体的行動、地域の安全への貢献などとしており、高等学校では、安全で安心な社会づくりの意義、地域の自然環境の特色と自然災害の種類、我が国のさまざまな安全上の課題への理解、自他の安全状況の適切な評価、安全な生活を実現するための適切な意思決定と行動、地域社会の一員として自らの責任ある行動や地域の安全活動への積極的な参加、安全で安心な社会づくりへの貢献などとしている。

これらの目標を達成するにあたっては、県及び市町において、これまでの事業等で蓄積したさまざまな先進事例も踏まえながら、学校種・地域の特性に応じた継続的で発展的な学校安全に係る取組を地域が一体となって進めることができる体制を構築することが必要である。

本事業は、市町等教育委員会を中心として、域内の学校で学校安全の組織的取組、外部専門家の活用、国私立を含む学校間の連携を促進し、地域全体での学校安全推進体制を構築するとともに、県域等へその仕組みを普及することを支援し、受託自治体内全域での学校安全の取組の推進をめざすものである。

(ウ) 事業の内容

学校種・地域の特性に応じた地域全体での学校安全推進体制の構築を図るため、県の教育委員会がモデルとなる地域（以下「モデル地域」という。）を設定し、モデル地域の市町等教育委員会が中心となってモデル地域全体での学校安全推進体制を構築する。モデル地域の実践を通じて得られた体制構築の成果等については県内の他地域にも普及し、県全体としての持続的な体制整備の構築へと広げ、県内のすべての地域において学校安全推進体制を構築する。

(エ) 三重県におけるこれまでの経緯

平成23年3月11日の東日本大震災を受け、平成24年度に「実践的防災教育総合支援事業」として始まったこの事業は、平成27年度からは「防災教育を中心とした実践的安全教育総合支援事業」、平成30年度からは「学校安全総合支援事業」として、内容の充実を図りながら継続し、全国で取組が進められている。

三重県教育委員会においては、令和4年2月28日までの事業計画を文部科学省に提出し、令和2年5月31日付けで委託契約を結んだ。また、事業の円滑な実施のため、三重県教育委員会から鳥羽市及び御浜町に再委託を行うこととした。

(オ) 成果の普及

この事業の取組による成果を、本報告書を活用し、県内の市町等教育委員会や各学校等へ普及・共有し、子どもたちの命を守るための学校安全の推進を図っていくことが求められている。

あわせて、各学校に設置している「学校防災リーダー」を対象とした研修会等で、事業の成果について報告と説明を行い、学校内及び域内へ浸透させていくことが重要である。

2 学校安全総合支援事業推進委員会

(ア) 目的

県教育委員会は、事業の円滑な実施のため、事業の実施方針や県内への普及計画の検討、モデル地域の市町等教育委員会への情報共有・指導・助言・支援、県における取組の検証を行う「推進委員会」を設置する。

(イ) 第1回推進委員会

- ① 開催日：令和3年11月15日（月）
- ② 場 所：書面開催
- ③ 議 題：（1）昨年度の事業報告について
（2）今年度の事業計画及び中間報告について
（3）コロナ禍における防災教育の手法について

(ウ) 第2回推進委員会

- ① 開催日：令和4年2月3日（木）
- ② 場 所：オンライン開催
- ③ 議 題：（1）今年度の事業報告
（2）課題及び今後の取組

< 推進委員会委員名簿 >

所 属	職 名	氏 名
三重大学大学院工学研究科	教授	浅野 聡
三重県教育委員会事務局高校教育課	充指導主事	谷奥 茂
三重県教育委員会事務局小中学校教育課	指導主事	島田 敏行
三重県環境生活部私学課	主幹	今高 成則
鈴鹿市教育委員会事務局	副主幹兼指導主事	天野 良平
鳥羽市教育委員会事務局	指導主事	大東 健吾
御浜町教育委員会事務局	主幹兼指導主事	大久保 敦史
三重県防災対策部消防・保安課	課長補佐兼班長	櫻井 健太郎
三重県教育委員会事務局生徒指導課	主幹（警部）	新 益美
津地方气象台	防災管理官	吉村 香
三重県教育委員会事務局	学校防災推進監	西田 恭子

3 三重県の事業

(1) 防災教育推進支援事業

いつ起きてもおかしくない南海トラフ地震や津波、頻発する台風や局地的大雨等の自然災害から児童生徒を守るためには、体験型防災学習を積極的に取り入れるなど、「自助」の防災教育を推進するとともに、学校が家庭や地域と連携し、防災対策の一層の強化を図ることが重要である。

県教育委員会では、学校防災リーダー等を中心に家庭や地域と連携した防災の取組を実施する学校に職員等を派遣し、防災教育の推進を支援する防災教育推進支援事業を平成24年度から実施している。

同事業では、児童生徒の防災学習や教職員の防災研修をはじめとして、保護者や地域住民と連携してさまざまな支援を行ってきており、令和3年度までにのべ1,481校が利用している。

防災講話や研修講義等の座学だけでなく、地震体験、防災タウンウォッチング、防災マップ作り、防災体験キット（防災すごろく、防災かるた等）、液状化実験やストローハウスなどの体験型防災学習や、避難所運営ゲーム等の図上訓練指導など、さまざまな支援プログラムを用意しており、児童生徒の発達段階や学校の実情に応じて柔軟な対応ができるようになっている。

事業の実施にあたっては、県教育委員会学校防災アドバイザーや教育総務課職員を学校に派遣するだけでなく、県防災対策部や県住宅政策課、三重建設技術センターとの連携を図るとともに、みえ防災・減災センターに依頼して防災ボランティアを派遣してもらうなど、幅広い人材を活用している。

また、児童生徒の防災意識を向上させるためには、体験的な防災学習を取り入れることが効果的であることを各種研修会等で周知することにより、児童生徒が体験的に学ぶことができる防災学習を実施する学校が増えてきている。

さらに、地域と一体となった防災の取組の重要性を周知することにより、授業参観日に防災学習を実施したり、PTAや地域住民との研修会において防災をテーマに取り上げたりする等、防災における学校と地域の連携促進や地域の防災意識の向上につながっている。

●各学校での主な取組●

① 伊勢市立東大淀小学校

日時：令和3年10月6日（水）、7日（木）

対象：3・4年生18人、地域住民10人

内容：「防災タウンウォッチング」「防災マップづくり」

具体的な内容

- ・ グループに分かれて、校区内を歩き、危険なもの、安全なところ、役に立つものを探した。写真係や、地図にメモを書いていく係等、役割を分担し、協力して行うことができた。
- ・ 調べたことをもとに防災マップを作成する。調べたものを地図に反映する際にはみんなで場所を確認したり、説明の文章を考えたりしながら、災害時に役立つ防災マップを完成させることができた。



② 県立桑名高等学校（定時制）

日時：令和3年10月12日（火）

対象：全校生徒（定時制課程）28人

内容：「防災クロスロード」「地震体験」

具体的な内容

- ・ 防災クロスロードでは、地震発生時にどのような行動を選べばよいか考えた。生徒たちはジレンマに陥り、なかなか決断できない様子だったが、災害についてあらためて深く考える機会となった。
- ・ 起震車による地震体験を行い、地震が起こったときに自分の身を守る方法を知るとともに、防災についての意識を高めることができた。



③ 津市立千里ヶ丘小学校

日時：令和3年10月19日（火）、11月4日（木）、11月16日（火）、
12月9日（木）

対象：4年生81人

内容：「防災講話」「防災クロスロード」「防災すごろく」「防災かるた」
「ストローハウス」「液状化実験」「住宅の耐震化実験（ぶるる）」
「家具固定体験」「地震体験」

具体的な内容

- ・ ストローハウスでは実際に模型を作り、柱と柱の間に「すじかい」を入れることで地震に強い建物になることを体験的に学ぶことができた。
- ・ 複数の体験型防災学習を行ったことで、地震から身を守る方法や家庭でできる防災対策等、防災についての理解が深まった。

④ 志摩市立磯部中学校

日時：令和3年10月28日（木）

対象：2年生52人

内容：「避難所運営ゲーム（HUG）」

具体的な内容

- ・ 避難所運営ゲームを行い、学校が避難所になった際の状況を仮想的に体験することができた。
- ・ 避難所において避難者が協力しあうことの大切さを知り、中学生の自分たちができることについて考える機会となった。



⑤ 鳥羽市立答志小中学校

日時：令和3年11月2日（火）

対象：全児童生徒78人、保護者30人、地域住民70人

内容：「液状化実験」「家具固定体験」「地震体験」

具体的な内容

- ・ 液状化実験では、地震によって液状化が起こる仕組みを理解するとともに、建物が傾くことや地中に埋められているものが浮き上がってくることを体験的に学ぶことができた。
- ・ 児童生徒だけでなく、保護者、地域住民にも参加してもらうことによって、地域全体の防災意識向上につながった。



⑥ 松阪市立豊田小学校

日時 令和3年11月30日（火）

対象 全児童146人、保護者25人、地域住民15人

内容 「防災講話」「防災クロスロード」「防災かるた」

具体的な内容

- ・ 防災クロスロードでは、災害時にどのようにして安全を確保するかについて保護者とともに話し合うことができた。
- ・ 児童生徒だけでなく、保護者、地域住民にも参加してもらうことによって、地域全体の防災意識向上につながった。

(2) 学校防災ボランティア事業

近い将来南海トラフ地震の発生が危惧される三重県では、県内の中高生が自らの命を守り抜くことに加え、支援者となり得る視点から、安全で安心な社会づくりに貢献できる知識や能力を習得することが求められている。

そこで、県内の高校生を宮城県の被災地に派遣し、現地の方々との交流や現地高校生等との防災合同学習を行うことなどにより、大規模な自然災害発生時に地域で自ら行動できる防災人材の育成に取り組んだ。

また、この事業を通じて学んだ東日本大震災の教訓や取組成果を県内で伝えることで、地域防災活動への意識向上をはかり、防災教育・防災対策の推進につなげることができた。

●主な活動内容●

【1月8日（土）】

- ① 宮城県・兵庫県・三重県の高校生による防災合同学習会・交流会
 - ・ 宮城県多賀城高等学校生徒の案内で、津波の被災した状況、爪痕など、タブレットで動画を活用しながらまち歩きを行った。
- ② 津波被災施設（大川小学校）視察
 - ・ 震災発生時、大川小学校の児童が集合した校庭の場所、避難した経路の説明を聞き、結果的に大川小学校の児童が避難しなかった校庭裏山にも登った。
 - ・ 大川小学校は「未来を拓く」場所だということや、一人でも多くの人に伝えてほしいということや、防災はハッピーエンドとなるために備えることであることなど学んだ。
- ③ 津波被災施設（南浜復興記念公園・MEET 門脇）視察
 - ・ 津波により発生した火災により被災した門脇小学校を訪問した。
 - ・ 3階部分の窓ガラスが全て割れ、黒いすすが残っており、津波火災の恐ろしさを伝える遺構であった。
- ④ 語り部による講話「私は生きなければならない」
 - ・ 避難所生活や仮設住宅での暮らし、語り部として活動している背景や、まず自分の命を守ることの重要性を学んだ。
- ⑤ 研修「命を守る学校防災について」
 - ・ 大川小学校であの日、学校で何があったのか、真実を知りたいという一心で訴訟を起こすに至った経緯や、学校における防災対策の重要性を学んだ。



【1月9日（日）】

- ⑥ 研修「タテ割り意識の見直しと若手人材の育成」
- ・ 被災者の方や、被災地支援を行っている方など、さまざまな方がアドバイザーとして入り、ワークショップを行った。
 - ・ 災害発生直後は、タテ割り意識を捨ててウェビング（くもの巣状）の考え方で災害対応にあたらなければならないことや、高校生をはじめとする若者の力が不可欠であることなどを学んだ。
- ⑦ 研修「命を諦めないで」
- ・ 津波は川を遡上することや、繰り返しやってくること、そして海に戻っていくときのスピードはすさまじいということなど、津波の恐ろしさについて学んだ。
- ⑧ 語り部による講話「未災世代のあり方を考える」
- ・ 自分の命を守ること、大切な人の命を守ることにつながる行動を取ることの大切さを学んだ。
- ⑨ 研修「日本一のまちづくりについて」
- ・ あおい地区の成り立ちや、起こったさまざまなトラブルとその解決法、孤独死を生まないための取組などについて学んだ。



(3) 北勢地域での取組

(ア) 白子高等学校での生徒会活動

① 学校安全アドバイザーと連携した取組

生徒会役員が地域安全に係る取組を進めるにあたり、学校安全アドバイザーと意見交換を行う機会を設けた。生徒会役員からは、「小中学校を訪問して、高校生が安全教室を実施してみてもどうか」「小中学校の児童生徒が活用する『登下校安全チェックリスト』や『地域安全マップ』を作成してみてもどうか」などの意見が出された。「このような取組を進めるにあたっては、警察にも協力を要請し、地域で発生している交通事故の状況等について把握することが必要」等の助言と、通学路等の危険箇所での安全対策や、道路状況を踏まえた安全な通学方法について指導を行った。



② 交通安全の啓発活動「横断歩道における安全指導」

鈴鹿市教育委員会が実施する「まもってくれてありがとう運動」に生徒会役員が参加し、白子駅南天理教前県道交差点と白子幼稚園南側交差点で、鈴鹿市教育委員会、白子小学校安全ボランティア等と連携して登校する小学生の見守りを行った。その後、生徒会役員は小学生に対して、横断歩道を渡る際に手を上げることや、渡り終えた後は止まってくれた車に一礼して感謝の気持ちが必要であるなどの声掛けを行った。

高校生が小学生の見守りを行うのは初めての取組で、地域住民や関係機関から感謝の意が伝えられた。鈴鹿市教育委員会や白子小学校の関係者からは、引き続き協力してほしい旨が伝えられたことから、取組を行う生徒会役員の地域に対する貢献や交通安全、防犯についての意識向上に繋がった。



③ 交通安全と防犯に係る啓発動画について

○ 動画作成について

白子小学校と鼓ヶ浦中学校で安全教室の実施を予定していたが、新型コロナウイルス感染症拡大に伴い中止となった。そのため、生徒会役員が意見を出し合い、安全教室の代替案として交通安全と防犯に係る啓発動画を作成することにした。学校安全アドバイザーが交通安全と防犯について事前に現地調査した際の注意点や、生徒会役員が現地調査を行って得られた注意点等を参考にし、小中学校と高校での安全教室で使用できる動画を作成した。



○ 警察と連携した取組

三重県警察の監修のもと、啓発動画を作成するとともに、話し方や映像の構成、交通安全と防犯に係る重要事項等、小中学生に伝えるための手法を整理した。



(イ) 通学路の安全点検等の実施

モデル地域内の通学路の点検と安全調査を行った。学校安全アドバイザーから、変則交差点で見通しが悪い箇所や、道路幅が狭く車との接触事故が考えられる箇所、歩道橋の登校状況から注意が必要な点等が報告された。また、防犯においては、高架下や地下道、人通りの少ない路地における定期的な巡回指導の必要性等が報告された。その結果については鈴鹿市教育委員会を通じて小中学校に共有した。



(ウ) 成果と課題

- ・ 高校生による出前授業（安全教室）は実施できなかったものの、高校生の安全意識の向上に繋がった。
- ・ 学校周辺の道路状況等を調査したことにより、これまで危険の認識がなかった場所を危険箇所と認識することができた。その結果、改善を行い、児童生徒の安全確保につなげることができた。
- ・ 今後は、道路管理者を含め、道路改善が必要とする箇所を町内で把握し、学校間及び、関係機関との連携を強め、警察等と連携し地域全体で通学路等の安全確保を効果的に取り組む必要がある。

4 鳥羽市の事業

(1) 南勢地域での取組

1. 講演会による啓発

(ア) 防災・減災教育講演会

市内外小中学校教員、市内外の教育委員会、行政関係者など 25 名が参加。及川幸彦氏を講師として招き、「学校と地域がともに歩む防災・防災教育」と題して講演会を開催した。「なぜ防災教育が必要か？」ということについて、過去の災害の教訓を踏まえ、SDGs と減災・防災教育や自助・共助・公助に続く N 助（培ってきたネットワークによる助け合い）の大切さをつなげて示していただいた。そして、持続可能な社会の実現をめざす防災教育について、全国の具体例を交えながら話していただいた。

(イ) 対象：市内外小中学校教員・幼稚園教員、行政担当者 等

(ウ) 事業のねらい

- ① 講演会において、「持続可能な社会の実現をめざす防災教育の展開」について学ぶ。
- ② 全国の、学校と地域が連携した防災・減災教育を例に、学校と地域の連携の方法や、その姿をとおして防災・減災・復興について学ぶ。
- ③ 過去の災害の教訓を学び、未来に備えることについて考える。

(エ) 講師

東京大学大学院教育学研究科附属海洋センター
主幹研究員 地球環境学博士 及川幸彦 氏

(オ) 実施日

講演会：令和 3 年 1 2 月 2 3 日（木）

2. 実践推進校による防災・減災教育の推進

(ア) 実践推進校：弘道小学校、長岡中学校

(以上の2校には、学校防災アドバイザーを派遣)

：安楽島小学校、弘道小学校、鳥羽東中学校、

(以上の3校は緊急地震速報システムの更新を行い、システムを使った避難訓練を積極的に行う。)

減災教育研究校：鳥羽小学校

(イ) 事業のねらい

「鳥羽市防災・減災学習プラン集」等を使用した防災・減災の授業実践を行い、学校防災アドバイザーの助言を受け、よりよい授業実践のあり方を学ぶ。指定校以外の小中学校の防災教育推進担当者も参加し、鳥羽市内の学校全体に広げる。

また、減災教育推進校として指定した鳥羽小学校においては、カリキュラムマネジメントをとおして防災・減災教育を持続可能な取組とする研修を行う。

(ウ) 防災アドバイザー

三重大学大学院工学研究科 准教授 川口淳 氏

(エ) 防災減災教育講師

東京大学大学院教育学研究科附属海洋センター

主幹研究員 地球環境学博士 及川幸彦 氏

特定非営利活動法人 SEEDS Asia

事務局長 大津山光子 氏

テクニカルアドバイザー 岸田蘭子 氏

(オ) 研究推進校の実践

① タウンウォッチングの成果発表

(7月9日：弘道小学校・長岡中学校)

各学年での授業

タブレットを使って、タウンウォッチングで撮った写真や、記録したメモをもとに、各グループでプレゼンテーション資料を作り、発表を行った。

中学校区での取組

- ・ 自分たちが住む地区（畔蛸、宇塚、漁協付近、千鳥）地区について、小学生（5・6年生）と中学生を6グループの縦割り班に分け、それぞれの地区を歩いて回った。防災・減災の観点で危険な場所、避難場所、減災のために必要な設備などを調べた。
- ・ グループで作成した防災マップやタブレットで地域の写真を提示し、発表を行った。自分の住んでいる地区だけでなく、他の地区の発表も聞くことにより、自分たちが調べた地区の再考につながった。



川口准教授からのお話

- ・ 「地震が起きたらどうなるか？」を想像し、人に伝えることができたことが評価できる。今回の取り組みはその想像力が見られたことが素晴らしい。
- ・ 「避難所に犬を連れてきてもいいか？」「避難所で生活が始まった時に、自分だけ防災バッグを持っている、あなたはその中の食料を食べるか？」など、決して答えが一つにならない状況を考えることは大切である。
- ・ 地震のメカニズムを考えることが必要。南海トラフを震源とする大地震は、100年に1回ほどの周期で起こっていて、前回の大地震から、70年経過していることを知っておく。



② 「地震の揺れを体験し、避難後の生活について想像しよう」

(10月29日：弘道小学校・長岡中学校)

災害用伝言ダイヤル171、起震車体験、避難所設営について、体験的に学びを進めた。その後、川口先生からの講評をいただいた。

災害用伝言ダイヤルについて

災害発生時、大切な人との連絡をどのようにとるか？をテーマに取り組んだ。災害時に、健康状態や自分の居場所などを、タブレットに30秒内の音声を録音し、それをグループで聞いてみる。そのような取り組みから、限られた時間でまとめ、話すことの難しさを実感した。

地震体験車

起震車に児童生徒、教員、保護者が乗車した。震度5～6強の地震を体感することで、巨大地震が起こった時に、どのような体勢で耐えるのがよいか、自分の家で倒れてきそうなものはないかなど想像することができた。

避難所設営について

- ・ 実際に体育館の冷たい床に寝てみる。その後、段ボールを敷いてシートにしてみる。段ボールベッドに実際に寝てみる。これらの取り組みから、段ボールベッドの役割とその効果について学んだ。
- ・ 鳥羽市防災危機管理室から災害用簡易テントを借り、実際に設営した。パーソナルスペースの確保が果たす役割を学んだ。
- ・ 避難所運営ゲーム HUG に取り組んだ。取り組んだ児童生徒からは「届いた毛布はどこに置く？」「一度部屋に案内した人に、もう一度移動してもらうのは簡単ではないよ。」「ペットを連れてきた人が来たよ。どうする？」など、困惑しながらも、よりよい避難所運営のために必要なことをグループで話し合うことができた。

川口准教授からのお話

- ・ 1回災害を経験すると行動できるが、今は想像することしかできない。今回、地震体験車を体験してみて、「怖い」と思えたことは大切である。怖い思いをしないために、自分に何ができるか考えることができる。
- ・ 避難所で一番のトラブルとなるのは不公平感。その不公平感を少しでも解消するためには、手書きの掲示板の設置を設置し、食料は何時に届いて全員に配布できますなどの情報を周知するために非常に重要なものである。

- ・ 段ボールベッドは高齢者が寝起きに欠かせない高さがあるので効果的である。直接床に寝ることで引き起こされる感染症も防げる。
- ・ 地震の後は、火事が起こりやすい。水道が止まるので、火が消せない。
- ・ 生き残る→生き延びる→記録をして次に伝える。将来鳥羽市を離れることがあっても、故郷を思うことはできる。助けることもできるという気持ちを持つこと。
- ・ 災害時、もし大人が避難しなくても避難する「率先避難」にことや、非常持ち出し袋の中身などについてぜひ家で話し合っほしい。



- ③ 離島地域での起震車体験（10月15日：菅島小学校）
（11月2日：答志小学校・答志中学校）
（12月15日：神島小学校・神島中学校）

防災減災教育推進のため、離島に地震体験車を派遣した。

離島各校に地震体験車を派遣することで、幼児・児童生徒と地域住民がともに学ぶ機会とした。地震体験車を体験した人数の半数近くは地域の住民であった。

菅島地区

早くから地域の掲示板に地震体験車の情報を掲示し、住民への周知を行った。人目につきやすい定期船乗り場付近の広場での実施であったため、船の乗降に関わる地域住民なども乗船することができ、体験を終えた地域住民は、自宅の耐震のことや、家具の固定についてなど積極的に防災啓発専門員へ質問をしていた。（参加者：75名）



答志地区

防災イベント「答志防災スクラム」を開催し、地元消防団や漁業協同組合の協力のもと、防災行事を開催した。児童生徒が作成した防災マップクイズ、消火器体験、応急手当の説明、防災食の説明、液状化実験などのブースを設け、グループに分かれ、小中学生は、すべてのブースに参加した。（参加者：112名）



神島地区

南海トラフを震源とする巨大地震で、想定される最大の振れを体験した。手を頭の後ろで組んで安全な体勢で地震に耐えることを学んだ。三重県教育委員会より講師を招き、地震が起きるメカニズムを学んだり、砂と水を入れた桶のふちをたたく液状化現象の仕組みの実験をしたりした。実験を通して液状化現象とは地面が下がるだけでなく、軽いもの（マンホール）などは上に上がってくるという性質を学んだ。（参加者：70名）



④ カリキュラムマネジメントと防災・減災教育

(2月14日：鳥羽小学校)

カリキュラムマネジメントオンライン研修会

- ・ 防災・減災教育を含めた ESD を効果的に実施していくために、カリキュラムマネジメント図作成の研修会を行った。
- ・ 先進的な取組を行ってきた、京都市立高倉小学校元校長で SEEDS Asia テクニカルアドバイザーの岸田蘭子氏と大津山光子事務局長の指導を受けながら、ワークショップ形式で研修を進めることができた。
- ・ 鳥羽市を持続可能なまちとしていくための、持続可能な取組とするための有意義な研修となった。今後鳥羽市全体に広める機会を持っていきたい。
- ・ 本研修会は 8 月 6 日にも行われ、2 回実施したことで、鳥羽小学校のカリキュラムを計画的に検証する研修となった。

5 御浜町の事業

(1) 東紀州地域での取組

ア 学校防災アドバイザー 三重大学大学院工学研究科 川口淳准教授

(ア) 第1回御浜町学校防災研修会（阿田和中学校第1回研修会）

日時：令和3年7月14日（水）8：45～10：35

場所：阿田和中学校

対象：全校生徒、教職員

内容：防災学習、避難訓練、防災講話（全校生徒：68人、教職員：14人）

具体的な内容

【防災学習】

全学級で「防災ノート」を使用し、「家にいるとき、または外出中に、大地震が起こったら」という内容について、課題を出しながらグループで学びあう活動を行った。

【避難訓練】

9時10分より、大地震を想定した避難訓練を行った。1年生は中学校での避難訓練は初めてということもあり、担任より事前に避難経路・注意事項等について指導を行ったうえで実施した。火災の発生はなしとしたため、通常の避難経路で全員がスムーズに避難することができた。



【防災講話】

事前に川口准教授に「登下校時、休みの日の外出時に大地震が起こったら」というテーマで、自分の身を守るためにどのような行動を取ればいいのか、また、自分の身の安全確保ができた場合、阿田和地域の中学生として何ができるのか、といったことを講演内容として要望した。

当日はその内容に沿った講演をしていただいた。避難訓練の講評として、火災が発生しなかった場合は、とにかく落ち着いて行動すること大切である。外出時の対応、中学生として貢献できることとしては、イメージする力（想像する力）をしっかり持って対応することが重要であると教えていただいた。

(イ) 第2回御浜町学校防災研修会 (御浜小学校第1回研修会)

日時：令和3年7月16日(金) 13:30~15:10

場所：御浜小学校 家庭科室

対象：5年生児童、教職員

内容：防災学習「ストローハウスを作ろう」 ～ストローで学ぶ耐震構造～
(5年生：36人、教職員：2人)

具体的な内容

【防災学習】

はじめに、川口准教授よりストローハウスを作る目的や作る時の注意点について説明を受け、その後、各班に分かれてストローハウスを作る作業を行った。児童は、川口准教授から聞いた「建物は、筋交いを入れることで耐震性が増す」という構造的な仕組みを、実際に模型を作ることで体感的に学び、さらに「筋交いをどのように組むことが効果的なのか」についても具体的に考えながら、ストローを使って耐震性のある建物をグループごとに作ることができた。



(ウ) 第5回御浜町学校防災研修会 (阿田和小学校第2回研修会)

日時：令和3年12月7日(火) 13:40~15:20

場所：阿田和小学校学校 家庭科室

対象：5年生児童、教職員

内容：防災学習「ストローハウスを作ろう」(5年生：22人、教職員：2人)

具体的な内容

【防災学習】

川口准教授から地震に強い建物を作る必要性があるという話を聞き、建築物には筋交いという三角形構造が重要な役割を果たしていることを聞いた。その後、児童一人ひとりが実際にストローを使って三角形の構造は強いということを確認した。それから4つの班に分かれて制作を始めた。班員一人ひとりが三角形構造を作り、それを班で一つにまとめて、大きな作品を作成した。班で工夫を凝らし、構造的に強く、デザインとしても美しい作品を作ることができた班もあった。



(エ) 第6回御浜町学校防災研修会（神志山小学校第1回研修会）

日時：令和4年1月17日（月）8:30～12:00

場所：神志山小学校 2階 多目的室

対象：全校児童、教職員

内容：防災学習「ストローハウスを作ろう」 ～ストローで学ぶ耐震構造～
(全校児童：23人、教職員：5人)

具体的な内容

【防災学習】

阪神・淡路大震災の起きた1月17日に実施したことで、川口准教授から「今日で震災から27年が経つ。震災では近畿圏の広域で大きな被害があった。その中で、震災での死亡原因の約8割が家屋の倒壊や家具などの転倒による「窒息死」や「圧迫死」であったこと。それらをなくすためには、倒れない頑丈な家を作ることが命を救う方法であり、建物の耐震性を確保することが大切だ。」と教えていただいた。また、いかに強度のある建物にするか、構造のしくみを教えていただいたうえで、実際にストローを使って耐震性のある建物を4つのたてわりグループごとに作成した。

その後の発表会で、グループで作った建物の工夫したところや、難しかったところなどを交流し、川口准教授から講評をいただいた。子どもたちはストローハウス作りを通して、建物が筋交い一つで丈夫になっていく様子を体感し、斜めの筋交いが校舎の耐震補強でつけられた斜めの鉄骨と同じであることに気づくなど、耐震構造の視点で建物に目を向けることができた。



(オ) 第7回御浜町学校防災研修会 (御浜小学校第2回研修会)

日時：令和4年1月17日(月) 13:05~14:45

場所：御浜小学校 家庭科室

対象：6年生児童、教職員

内容：防災学習「タウンウォッチングをおえて」

(6年生：34人、教職員：2人)

具体的な内容

【防災学習】

6年生は、事前(1月13日(木))に学校区内のタウンウォッチングを行った。

学年を5班に分けた後に担当ルートを決め、役場の防災担当の方やコミュニティスクールの委員さんにも協力をいただいて、防災の視点を持って、自分たちが暮らす町を見て回った。気づいた箇所では写真を撮り、コメントを添えた「カード」を作成するための準備をした。次の日(1月14日(金))にカードを作成しながら、校区地図にそのカードを貼り、自分たちが気づいたことや危険箇所について発表する準備を行った。

発表会当日は、タウンウォッチングをして気づいたことや、実際に見て回って不安に感じたこと、疑問に思ったこと等も含め川口准教授に聞いていただき、講評として「タウンウォッチングをする目的」や「地震が起きた際のとるべき行動」等のアドバイスをしていただいた。最後には児童からの質問に答えていただいた。



(カ) 第8回御浜町学校防災研修会（尾呂志学園小中学校第1回研修会）

日時：令和4年1月21日（金）10:40～14:20

場所：尾呂志学園校区内（上野、栗須、川瀬地内）、尾呂志学園美術室）

対象：全校児童生徒、教職員、尾呂志自主防災会

内容：防災学習「タウンウォッチング・マップ作り」

（小学生：14人、中学生：8人、教職員：15人、尾呂志自主防災会：5人）

具体的な内容

【防災学習】

3、4限目に尾呂志学園校区内4カ所をタウンウォッチングした。タウンウォッチングでは、地震が起きたときに危険な場所やもの、災害時に役に立つ場所やもの、火を消すものを捜しながら町をまわった。自主防災会の方から教えていただき、該当する場所やものを写真に撮り、理由を記録しながら確認した。



5限目は、美術室で大きな図に、危険な場所やものは赤、災害時に役立つものは緑、火を消すものは青のシールと撮影した写真と記録を書き、防災マップを完成させた。

防災マップ完成後、各班が「危険なもの3つ、役に立つもの1つ、危険なものに近いとき地震が起きたらどうするか」を発表し、意見交流した。



(キ) 子どもたちの感想

(ストローハウス)

- ・ 自分が家を建てるときに、参考となることをたくさん知ることができた。
- ・ 形によって、崩れにくい形と崩れやすい形があることを知った。四角形は崩れやすいが、四角形のなかに三角形をいれることで強い家にする事ができることを知った。
- ・ 最初は難しいと思ったが、みんなと協力して完成できた。それを川口先生に褒めてもらえて嬉しかった。
- ・ 三角形は本当に強いことが分かった。
- ・ 家を建てているときに斜めの柱があるのを見たが、なぞがとけた。
- ・ 学校の外側にも筋交いがあることの意味がよく分かった。
- ・ ストローハウスでは、壁にいっぱい三角形があった方が地震に強いということを知った。
- ・ 日本は地震が多く起きてしまうけど、日本の家は地震に強いつくりになっていることを知った。
- ・ 三角形が地震に強いことが分かった。ぼくたちの班は家の壁を三角形にしてみた。すると、さかさまにしてゆらしても崩れなかった。すごいと思った。川口先生に、屋根の中のダイヤの形は崩れにくくする技術だとほめてもらった。大きくなったら、いっぱい三角があるじょうぶな家を建てる。
- ・ 地震で家が壊れる映像を見た時、怖いなと思ったけど、1つは壊れて、もう1つは壊れていない家があったから、それは三角があるんだなと思った。

(タウンウォッチング)

- ・ 地震が起きたときに、どういう行動をとったら良いのか、どこへ逃げるのが良いのかを教えてもらった。地震の後に津波が来ることも想定して行動することが大事だということがわかった。
- ・ 災害時に一番大切なものは、水だということにおどろいた。また、川口先生の話のなかで、災害時の「水」と「食料」の大事さに、天と地ほどの差があるという話を聞いて、御浜町はきれいな水があるので、すこし安心した。
- ・ 地震が起こった時に田んぼが液状化したり、地震の後、津波が川をさかのぼったりする話を聞いて、自分がいる場所によって避難する場所を考えることが大事だと思った。
- ・ 地震の時、危険なものや場所を考えるだけでなく、実際に行って再認識することが大切だと思った。
- ・ まわったルートには公衆電話がなかったので、どこにあるか確認したい。
- ・ どこが危険か安全か話し合いながら町をまわられたのでよかった。

(ク) 成果と課題

防災学習の様子を参観していただいたり、協力依頼をして一緒に参加していただいたりするなど、保護者や地域を巻き込んだ防災学習や避難訓練を計画する学校が増えている。御浜中学校では、保護者や地域住民に呼びかけ、子どもたちの防災学習を参観してもらう計画をした。尾呂志学園小中学校では、タウンウォッチングの際、各グループが地域の自主防災組織の方とともにまちあるきを行った。町内すべての学校がコミュニティスクール化されたことを受け、学校運営協議会等においても議案とし防災についてともに考える機会が増えている。

各校で工夫した防災教育の取組が実施されている。取組の交流・共有を図りながら、今後も町全体としての防災教育の充実に努めたい。